京都美術の歴史学―京都芸大の 1950 年代

2022 年度活動報告

本研究では戦後の占領期・復興期の京都における本学彫刻専攻及びデザイン専攻の教育について調査を行っている。2022 年 3 月 14 日、芸術資源研究センターにて研究会を実施し、菊川と牧田久美が研究発表を行った。各研究室の教育改革には 1950 年の大学昇格という制度的な問題にも関わるものであり、出席者から他専攻の事例についても新たな知見を得ることができた。この意見交換をふまえつつ本年は個別に研究を進めた。

菊川は堀内正和及び辻晋堂について、ご遺族及び画廊が所蔵する一次資料調査を再開し研究を進めている。今年度は研究内容について全国の研究者、学芸員、作家と意見交換する機会に恵まれ、「生誕 100 年　清水九兵衛／六兵衛」展（千葉市美術館、京都国立近代美術館）、「AGAIN-ST ルーツ／ツール 彫刻の虚材と教材」展（武蔵野美術大学美術館･図書館）のトークイベントに登壇し、前者は『視る』（522 号、京都国立近代美術館）に、後者は同展図録に論考を寄せた。また彫刻家・陶芸家の宮永理吉氏への聞き取り調査を日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴから一般公開し、50～70 年代にかけての教育の様子、学生たちの姿について具体的に明らかにした。以上のことから本学の教育及び京都の戦後彫刻の特質を、東京藝術大学を中心に築かれてきた美術大学の彫刻教育と相対化し、関係者と問題意識を共有できたことは収穫であった。

牧田は上野リチの本校におけるデザイン教育の詳細を明らかにするため、彼女の在職中（1951～63 年）の卒業生約 340 人のうち返信可能な約 100 名に、その教育の概要と具体的な内容についてのアンケート調査を 3 月に実施した。6 割を超える回答者から、リチのウィーン工房由来の非常に独自でインパクトのある教育姿勢が詳細に語られ、また想定を超えるリチ研究への支持と賛同を得た。現在、多くの卒業生の協力の元に、より具体的な詳細について個別聞き取り調査を継続し、リチの理念がいかに彼らのデザイン活動や社会貢献に活かされたかを調査している。

また各氏の卒業後の活躍を追い、戦後急増した企業におけるデザイン関係の仕事の実情について、戦後デザインの本格的始動という歴史的文脈から調査を進めている。リチが教育者として携わったのは産業が急成長する時代で、新しい業種や商品が次々と開発され、旧来の図案的思考からデザイン的思考への転換が急務とされていた。デザイン教育の必要が叫ばれるこの時期に、リチの先駆的教育が多くの優秀な人材を輩出し、業界を牽引した事実が調査で具体的に明らかになりつつある。これらを現在収集しているリチ在職中の実習作品や授業活動関連の写真資料の整理分析や資料収集と関連づけ、リチのデザイン教育の構想と具体的な実情についての本格的なアーカイブの構築を進めている。

一方、デザイン関係の需要の急増で美術大学に受験生が殺到し、これらに対して上野夫妻は入学生の増員を学校側に要求し、企業側の男性中心の求人に対して女性にも門戸解放するよう提案するなど積極的に関わった。また海外留学の便宜もはかった。このようなグローバルかつジェンダーフリーな姿勢にも注目している。

冒頭で述べたような教育改革の背景である大学をとりまく状況の変化にも留意しつつ、プロジェクトの着地点を見据え研究を進めていきたい。

菊川亜騎

1963 年リチ最後となる一時帰郷の出航を見送る船内のスケッチ（1965 年工芸科デザイン専攻卒業越田英喜氏提供。船外でも学生や卒業生など大勢が見送ったという）

1958 年度工芸科図案専攻卒業写真（1958 年度卒業魚谷忠志氏資料提供）

1952 年当時のリチのクラスでの色紙による作品（1954 年度工芸科図案専攻卒業梨木祐宣氏提供）